

内的要因に適合させて選択する進路への態度について

田 島 司

Attitude toward a chosen career that matches internal factors

Tsukasa Tajima

The aim of this study was to examine the relationship between one's sense of control of internal factors and one's attitude toward a chosen career that matches the internal factors. Participants completed a questionnaire about the motivations for their career choices that matched internal factor, sense of control of internal factors, and attitude toward their chosen career. The results showed they were motivated to make career choices based on their present interests and hobbies that they believed were possible to control. In the group motivated to make choices that matched controllable internal factors (control choice-oriented high group), the attitude toward a chosen career that matched those controllable internal factors was more affirmative than the attitude toward other careers. In the control choice-oriented low group, the degree of sense of control of several internal factors was negatively correlated with the attitude toward a chosen career that matched those internal factors. The possibility of the application of these findings to career guidance was also discussed.

Keywords: career decision process, sense of control, planned happenstance theory

問 題

多数の選択肢から職業等の進路を決定する際には、例えば「給与が高いか」、「勤務地が近いかな」などのような各進路先に付随している客観的な外的要因だけを選択の手がかりとするのではなく、対象となる進路が、能力や興味などのような自己の心理的、肉体的属性である内的要因に適合するかを重視して選択する場合がある。特に近年の若者の進路選択において、自分に合った「適職」であることを重視した職業選択が行われているという指摘（安達, 2004, 萩原・櫻井, 2008, 若松, 2010）や、「自己分析」とよばれる自己の内面と仕事・就職との関係について深く掘り下げる手法によって、職業への適性を発見することが就職活動において不可避の作業となっているという指摘（鵜飼, 2007）があり、これらは上記のような進路選択の特徴の一端をよく表現していると思われる。また、内的要因との適合に基づいて進路を選択することが、進路選択の過程や結果に対して満足が得られるなど肯定

的な影響を与えることを指摘する研究もある (Holland, 1973; 下村・木村, 1997; 中野・大倉・酒井・栗山・稲岡・宮崎・柏, 2010)。このように内的要因との適合に基づいた進路選択過程が注目されているが、どのような内的要因との適合が重視されるかという問題については複数の見解がある。例えば Gottfredson (1981) は、進路選択過程において現実的には当初の目標が叶わず妥協しなければならない場合があるが、その際に、最も犠牲になりやすい要因は進路への興味であり、自分の興味に適合する職業へ進むことはあきらめやすく、性タイプや名声と適合する進路希望は維持されやすいとした。一方、Hesketh, Elmslie, & Kaldor (1990) の研究では、進路選択において興味という要因が性タイプや名声に比べて最も重視されることが示されている。

また、どのような特徴を持つ内的要因との適合が選択後の進路に対する態度に影響を与えているかについても十分に明らかにされていないわけではない。例えば、若松 (1991) が行った調査では、自己の興味や性格、体力などの 16 種の適合感と教職への志望度との関連を検討しているが、すべての適合感が志望度と関連を持つわけではなく、志望度に関連するか否かの区別が因子分析による分類に対応していないことが報告されている。さらに、若松 (2010) の調査では、進路に対する適合の観点を分類し、それらが進路の意思決定に対する納得感などと関連するかを検討しているが、適合の観点によっては、それを重視することが納得感などとむしろ否定的な関わりをもつことが報告されている。

そこで本研究では、どのような内的要因との適合によって進路を選択することが求められているか、また、内的要因に適合する進路を実際に選択させた場合の進路への態度が内的要因の種類によって異なるかを検討する。

その際に、本研究で特に着目するのは内的要因に対する統制感である。近年の若者の進路選択について「やりたいこと志向」(安達, 2004) と表現されることをふまえて考えると、「やりたい」という自己の意志に沿って主体的に進路選択しようとする傾向があり、統制感が高い内的要因との適合によって進路選択をすることが重視されているように思われる。

選択に関わる自己の統制と選択結果に対する態度について検討する際には自己決定理論 (self-determination theory; Deci & Ryan, 1985) に基づいた研究成果が参考になるだろう。例えば、進路選択の際に自己決定性が高く自律的であるほど、仕事を持つことへのコミットメントが高く (Vansteenkiste, Lens, Witte, Witte, & Deci, 2004)、進学先での満足感が高い (永作・新井, 2005) ことが報告されている。また、何事も自分で決めるという傾向のある者は、決定した進路に対する後悔が小さいという調査結果もあり (楠見・栗山・齋藤・上市, 2008)、このような選択は適応的な結果と関連するように思われる。これに加えて、進路選択過程を扱ったものではないが、選択における統制が選択結果の成功確率の評価と関連することを示唆する研究もある。Langer (1975) は、実際には偶然によって結果が規定される宝くじを利用して実験を行ったところ、どの 1 枚を選択するかが自己の意志で統制できる条件の実験参加者は、自己の意志で統制できない条件の実験参加者よりも選択した宝くじを他の宝くじと交換しながら、他者に売る際には高い金額を要求した。その理由について、自己の統制が過剰に見積もられて結果の成功確率が高く期待され、価値の高いものを選択できたと感じられたためであると解釈されている。これらのことをふまえると、自己の統制が高く認知さ

れる内的要因との適合で選択した結果の成功確率は高く感じられるため、そのような内的要因との適合を選択基準にすることを求めるとともに、選択した進路は価値が高く、選択が妥当であると確信するなどの肯定的な態度が向けられることが予測される。

一方で、自己の統制が低い進路選択に対して肯定的な態度が向けられるという可能性も考えられる。Mitchell, Levin, & Krumboltz (1999) のプラントハップンスタンス理論 (planned happenstance theory) では、進路選択は本人が計画的に統制するものではなく、偶然の出来事が重要な役割を果たしキャリア形成に大きな影響を与えると考えられている。予期せぬ出会いや事故などによって意図していなかった仕事に就くことも多いが、それに対してオープンマインドになり満足していく事例も多く報告され (Krumboltz & Levin, 2004)、自己が統制できない要因によって決まる進路にも肯定的な態度が向けられることが示唆されている。また、田中・小川 (1985) は、Holland (1973) の職業選択理論を援用しながら、人は自分の人格型に調和した職業環境を求め、子供の人格型は親に類似すると仮説をたてて調査を行った。その結果、親子で類似した職業環境を求めるという予想通りの結果を得ている。親に類似する人格型という内的要因に対して統制が高く認知されるとは考えにくく、そのような内的要因との適合に基づく進路の選択がむしろ望まれる場合があるとすれば、前述した、自己の統制が高く認知される内的要因との適合で進路選択することを求める傾向とは異なる。しかし、親子の職業継承性を指摘するこのような結果は、労働環境上の肯定的な情報が伝えられ易かったり、有利な資源が親から子へと引き継がれ易かったりするために生じているとも解釈でき、そうだとすれば外的要因に基づいて選択した結果であるとも考えられる。したがって本研究では、内的要因に対する統制感、進路選択の基準としたい程度を測定するとともに、外的要因との関連による影響が混入しないよう、内的要因との適合によって実際に進路を選択させる実験的手法を用いて進路への態度を測定し、それらの関連を検討する。また、自己の統制が高く認知される内的要因との適合で選択することが肯定的態度になることと、自己の統制が低く認知される内的要因との適合で選択することが肯定的態度になるという相反する側面の存在が想定されることから、本研究では、それら2つの側面の存在を確認するために、進路選択の個人的傾向に基づいて参加者を分類したうえで分析をすすめていく。

方 法

予備調査

本調査で用いる「内的要因」の項目作成の参考とするために、大学生が進路選択過程においてどのような内的要因との適合を重視するかを聞き取り調査した。調査対象者は就職活動中の大学3年生6名と就職活動を終えた大学4年生7名の計13名である。調査対象者に「卒業後の進路(就職・進学)先を選ぶ際に考慮した(したい)こと」について自由に回答するよう求めた。続いて、本調査で用いる「選択進路への態度」の項目作成の参考とするため、進路に対する態度が具体的にどのような感じ方によって体験されるのかを聞き取り調査した。調査対象者に「進路の第一志望を絞ることができた(できそうな)時は、その進路先について、どのような気持ち(感じ・考え)になった時ですか」と問い、自由に回答するよう求めた。

内的要因に適合させて選択する進路への態度について

「内的要因」について調査で収集された内容から、曖昧な表現や少数者にしか当てはまらないような内容を除いたうえで、本研究で用いる内的要因の測定項目として適切な内容を選定した。さらに、下村・堀（1994）が大学生を対象とした調査で用いた職業選択において重視する情報についての項目と、松本（1994）が大学生を対象とした調査において用いた職業選択要因の項目を参考にして、最終的に内的要因として6項目を選出した。具体的には、「現在の興味・関心」「趣味・好み」「性格」「知的能力」「学部・学科」「子供の頃の興味・関心」である。「学部・学科」については自己の属性そのものとは言いがたいが、興味関心、趣味好み、知的能力などを反映して決定されていると考えられるために含めることとした。

「選択進路への態度」についても同様に、調査で収集された内容から曖昧な表現や一般的ではない特殊な内容を削除したうえで、本研究で用いる選択進路への態度の測定項目として適切な内容を8項目選別した。具体的には、「その進路先で楽しくやっていけると思う」「その進路先に進むことを想像するとワクワクする」「その進路先で活動するのが楽しみだ」「そこに『行きたい』という気持ちがとても強い」「その選択が自分に合っていると確信している」「それが正しい選択だという自信がある」「他の人からも、その選択で良いと言われると思う」「それは自分にとって価値の高い選択だと思う」である。

本調査

調査対象者は大学生473名（男性188名、女性285名）、平均年齢18.8歳（SD = 1.11）であり、文学部や法学部等の文系5学部（302名）と、工学系の理系1学部（171名）に所属する学生である。調査は大学の講義を利用して質問紙法で行った。

質問紙の1ページ目では、内的要因の「選択基準としたい程度」、つまり、各内的要因との適合を基準にして進路を選択したいと思っている程度を測定した。6つの内的要因それぞれについて、「…に合っているかどうかで職業（進路）を決めたい」と問い、5件法（1：全くそう思わない～5：全くそう思う）で回答を求めた。

2ページ目では、6種の内的要因の内いずれか1つが記載されており、その要因との適合を基準にしてリストの中から希望の職業を選択するよう求めた。職業の選択は、36の業種と20の職種からそれぞれ1つずつ選んで組み合わせる方法を用いた。業種と職種のリストは、厚生労働省編職業分類やインターネット上にある大学生向け就職情報を参考にして作成した。

3ページ目では、前ページで選択した職業に実際に就職することを想像させ、その「選択進路への態度」を8項目に8件法（-4：全くそう思わない～4：全くそう思う）で回答を求めた。

最後に、内的要因に対する「統制感」を測定するため、6つの内的要因それぞれについて、「自分自身でどの程度コントロールできることだと感じるか」と問い、5件法（1：まったくコントロールできないと感じる～5：自由にコントロールできると感じる）で回答を求めた。

結 果

「選択基準としたい程度」の得点を用いてクラスタ分析（Ward 法）を行った結果，調査対象者を 2つのクラスタに分類することができた。クラスタの特徴を確認するために，「選択基準としたい程度」を従属変数として 2（クラスタ：第 1 クラスタ，第 2 クラスタ）× 6（内的要因種：現在の興味・関心，趣味・好み，性格，知的能力，学部・学科，子供の頃の興味・関心）の 2 要因分散分析を行った。その結果，クラスタの主効果が有意であり ($F(1, 471)=426.14, p<.01$)，下位検定の結果，いずれの内的要因種においても第 1 クラスタの選択基準としたい程度は第 2 クラスタより低かった。また，内的要因種の主効果 ($F(5, 2355)=260.97, p<.01$)，および交互作用 ($F(5, 2355)=18.54, p<.01$) が有意であり，下位検定の結果，第 1 クラスタ ($F(5, 2355)=175.41, p<.01$) においても，第 2 クラスタ ($F(5, 2355)=104.10, p<.01$) においても内的要因種の単純主効果が有意であり多重比較を行った ($MSe=0.80, p<.05$) (Table 1)。第 1 クラスタでは「現在の興味・関心」と同程度に「性格」が最も高く，第 2 クラスタでは「現在の興味・関心」「趣味・好み」の方が「性格」よりも有意に高いという違いがみられた。また，第 1 クラスタでの「知的能力」の順位は第 2 クラスタでのその順位に比べて高かった。第 1 クラスタは「選択基準としたい程度」の得点が全体的に低く，「性格」と「知的能力」についての相対的な順位が高いという特徴から，自己の統制が及びにくい内的要因に基づく選択も志向していると解釈でき，第 2 クラスタは自己の統制が高い内的要因に基づく選択を特に志向すると解釈できる。そこで第 1 クラスタに含まれる対象者を「統制的選択志向 - 低群」，第 2 クラスタに含まれる対象者を「統制的選択志向 - 高群」とした。

次に，内的要因の「統制感」の程度を従属変数として，「統制的選択志向」と「内的要因種」による効果があるかを検討するために，2（統制的選択志向：統制的選択志向 - 低群，統制的選択志向 - 高群）× 6（内的要因種：現在の興味・関心，趣味・好み，性格，知的能力，学部・学科，子供の頃の興味・関心）の 2 要因分散分析を行った。その結果，「統制的選択志向」の主効果 ($F(1, 471)=7.56, p<.01$) が有意であり，統制的選択志向 - 低群は全体として統制感が低かった。また，内的要因種の主効果 ($F(5, 2355)=105.44, p<.01$) が有意であった。多重比較の結果は Table 1 に示した ($MSe=0.76, p<.05$)。

Table 1 各内的要因を選択基準としたい程度と統制感の平均値と標準偏差

内的要因種	選択基準としたい程度				統制感			
	統制的選択志向 - 低群 (n=248)		統制的選択志向 - 高群 (n=225)		統制的選択志向 - 低群 (n=248)		統制的選択志向 - 高群 (n=225)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
現在の興味関心	4.02	a 0.98	4.73	a 0.44	2.83	b 1.06	2.97	b 1.05
趣味・好み	3.55	b 0.95	4.52	b 0.57	3.08	a 1.04	3.17	a 1.05
性格	3.86	a 1.01	4.31	c 0.85	2.10	c 1.11	2.35	c 1.11
知的能力	3.10	c 0.93	3.57	e 1.06	2.17	c 0.96	2.36	c 0.99
学部・学科	2.65	d 1.07	3.94	d 1.04	2.87	b 0.94	2.95	b 1.00
子供の頃の興味関心	2.00	e 0.83	3.17	f 1.12	2.08	c 1.18	2.38	c 1.17

表中のアルファベットは群内における多重比較の結果である

内的要因の統制感の程度と，その内的要因を選択の基準として進路を決めたいと思う程度の間関係を検討するために，各内的要因について「選択基準としたい程度」と「統制感」との相関係数を算出し

内的要因に適合させて選択する進路への態度について

た。その結果、統制的選択志向 - 低群においては、「趣味・好み」と「性格」でそれぞれ負の相関関係がみられ、統制的選択志向 - 高群においては「現在の興味・関心」、「学部・学科」、「子供の頃の興味・関心」でそれぞれ正の相関関係がみられた (Table 2)。

Table 2 「選択基準としたい程度」と「統制感」との相関係数

内的要因種	統制的選択志向	
	志向-低群	志向-高群
現在の興味関心	-.06	.15 *
趣味・好み	-.16 *	.03
性格	-.12 †	-.01
知的能力	-.04	-.08
学部・学科	.10	.13 *
子供の頃の興味関心	.07	.20 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

次に、「選択進路への態度」を測定する 8 項目について項目分析を行った。主成分分析を行ったところ第 1 主成分 (固有値: 5.87, 寄与率: 0.73) で十分な説明率が得られ、すべての項目が第 1 主成分に .71 以上の負荷があった。また、8 項目全体のクロンバックのアルファ係数は .95 であった。これらの結果から内的整合性が高いと判断し、以降の分析では 8 項目の平均得点を用いて「選択進路への態度」の得点とした。得点が高いほど肯定的な態度を意味する。

「選択進路への態度」の得点を従属変数として、「統制的選択志向」と「選択の基準とした内的要因」による効果があるかを検討するために、2 (統制的選択志向: 統制的選択志向 - 低群・統制的選択志向 - 高群) × 6 (選択の基準とした内的要因: 現在の興味・関心, 趣味・好み, 性格, 知的能力, 学部・学科, 子供の頃の興味・関心) の 2 要因分散分析を行った。その結果、「統制的選択志向」の主効果 ($F(1, 461)=20.60, p < .01$) が有意であり、「統制的選択志向 - 低群」($M=0.41, SD=2.06$) より「統制的選択志向 - 高群」($M=1.17, SD=2.05$) の方が高かった。また、「選択の基準とした内的要因」の主効果 ($F(5, 461)=3.62, p < .01$) と交互作用 ($F(5, 461)=3.60, p < .01$) が有意であった。下位検定の結果、「統制的選択志向」の単純主効果は、「現在の興味・関心」($F(1, 461)=18.69, p < .01$) と「趣味・好み」($F(1, 461)=17.64, p < .01$) でのみ有意であり、「選択の基準とした内的要因」の単純主効果は「統制的選択志向 - 高群」($F(5, 461)=5.79, p < .01$) でのみ有意であった。多重比較の結果は Table 3 に示した ($MSe=4.03, p < .05$)。

Table 3 選択した進路への態度の平均値と標準偏差

選択の基準とした 内的要因	統制的選択志向-低群			統制的選択志向-高群			
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	
現在の興味関心	-0.21	- 1.95	34	**	1.72	ab 1.86	45
趣味・好み	0.59	- 1.86	49	**	2.57	a 1.18	27
性格	0.96	- 2.00	42		1.03	b 1.92	37
知的能力	0.37	- 2.01	45		0.91	b 2.16	34
学部・学科	0.24	- 2.11	33		0.60	b 1.99	44
子供の頃の興味関心	0.32	- 2.21	45		0.54	b 2.17	38

** $p < .01$ (「統制的選択志向」の単純主効果)

表中のアルファベットは群内における多重比較の結果である

最後に、内的要因に対する統制感の程度と、その内的要因を選択基準として実際に進路選択した際の選択進路への態度との関連を検討するために、各内的要因について「統制感」の程度と「選択進路への態度」との相関係数を算出した (Table 4)。その結果、「統制的選択志向 - 低群」においては、「学部・学科」において負の相関関係がみられ、「子供の頃の興味・関心」では正の相関関係がみられた。「統制的選択志向 - 高群」においては、「現在の興味・関心」と「子供の頃の興味・関心」で正の相関関係がみられた。

Table 4 「統制感」の程度と「選択進路への態度」との相関係数

選択の基準とした 内的要因	統制的選択 志向-低群	統制的選択 志向-高群
現在の興味関心	.06	.43 **
趣味・好み	-.17	.28
性格	.12	.08
知的能力	.07	-.07
学部・学科	-.32 †	-.06
子供の頃の興味関心	.30 *	.28 †

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

考 察

「現在の興味・関心」と「趣味・好み」という内的要因はいずれの群においても統制感が高く、これらを選択基準としたい程度も高かったことについては、統制感の高い内的要因との適合を選択基準にすることを求めるという予測に沿っており、Hesketh, et al. (1990) の結果とも矛盾するものではない。興味がなく好まない仕事に就くことになれば、就業への意欲がわからず内発的動機が低下する可能性がある。それを避けるような選択を重視していると思われる。一方、「性格」と「知的能力」への統制感是最も低かったが、それを選択基準としたい程度の順位が「統制的選択志向 - 低群」の方が高く、特に「性格」は最も高かった。この結果は、前述した田中・小川 (1985) の研究で、子供の人格型は親に類似する故に親子で類似した職業環境を求めると仮定されていたこととも矛盾せず、必ずしも統制感の高い内的要因のみを選択基準としたいわけではないことを示唆している。性格や知的能力のような内的要因は統制感が低いものそれを選択基準として求められることもあるのは、これらの内的要因が適合しない進路を選択することになれば職務上の期待に応えることが難しくなる可能性があり、しかも自分では統制できないため改善も難しいという実質的な適応上の困難が生じうるという理由が考えられる。

選択基準としたい程度と統制感との間に正の相関関係がみられた内的要因もあったが、「統制的選択志向 - 低群」においては負の相関関係にあった内的要因があり、必ずしも統制感が高いほどその内的要因を選択基準としたい程度が高くなるわけではないことが明らかとなった。負の相関関係にあったのが「趣味・好み」と「性格」であった理由は断定できないものの、これらの内的要因に対して自己の自由な意志をあまりに優先していると感じる場合には、職場等での適応において良い影響を及ぼさないと考えている可能性がある。つまり、趣味や性格が、他を顧みず外的環境に左右されないよう

な奔放なものであれば、それらに基づいて進路選択することに適応上の危うさを感じたのかもしれない。

選択した進路への態度において、「統制的選択志向-高群」では「趣味・好み」、次に「現在の興味・関心」が高く、それぞれ「統制的選択志向-低群」での値より有意に高かったが、これらの内的要因は統制感と選択基準としたい程度も高いことから、「統制的選択志向-高群」では自己が統制できる要因に基づいて進路選択することを求めるだけでなく、実際にそれらの内的要因に適合させて進路選択した結果にも肯定的な態度が他より高まるといえる。一方で、「統制的選択志向-低群」においては、統制感や選択基準にしたい程度が高い内的要因に基づいて選択した進路であっても態度は肯定的にならなかった。また、「学部・学科」の統制感が高いほど選択進路への態度が否定的になる傾向があった。大学受験時に学部や学科を選ぶ際に、就職等の状況をふまえずに自己の自由な意志のみに基づいて選んでしまったと感じているほど、それに基づいて選択した進路に否定的な態度を持ったと考えられる。

進路選択過程においては、自己の統制できる要因に基づいて主体的に選択することを求める一方で、偶然や遺伝、他者からの要請など自己の統制の及びにくい事柄を考慮して調整や折り合いを必要とする場合がある。「統制的選択志向-低群」においては、統制感の高い趣味・好みや興味・関心に基づいて進路選択したいという気持ちはあるものの、むしろ統制感の低い内的要因に基づいて選択することも求め、選択結果も肯定的態度となるという両面性が現れていたように思われる。「統制的選択志向-高群」ではそのような両面性はなく、統制感が高い内的要因で進路選択することを重視していたといえよう。

これらの結果を進路指導過程との関わりで見ると、進路選択に対する個人の志向性によって異なる対応が必要であることが示唆される。興味・関心や趣味・好みなどのような自己の統制が高い内的要因に基づく選択だけを志向する個人に対しては、それらの内的要因を基準とする本人の意志を尊重した進路選択を推奨することで選択結果の肯定的態度にもつながると期待できるが、統制感の低い内的要因との適合が職務上の適応とかかわることを軽視していることなども考えられるので注意が必要であろう。一方、自己の統制が及びにくい内的要因に基づく選択も志向している個人の場合には、興味・関心や趣味・好みなどの内的要因を基準としても選択結果は肯定的な態度になりにくい。そもそも職業未決定の場合には、自分がどのような仕事に興味があるかが不明確でよくわからないという自覚が生じやすく（下山, 1986; Jones, 1989）、興味・関心などに基づいて進路選択するのが困難なこともある。そのような場合に、むしろ、できるだけ統制感の低い趣味・好み、性格、学部・学科などの適合を基準とした進路選択を推奨することも指導上の選択肢の一つになると考えられる。

引用文献

- 安達智子 (2004). 大学生のキャリア選択—その心理的背景と支援 日本労働研究雑誌 533, 27-37.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. Springer Science & Business Media.
- Gottfredson, L.S. (1981). Circumscription and Compromise: A Developmental Theory of Occupational Aspirations. *Journal of Counseling Psychology Monograph*, 28, 545-579.
- 萩原俊彦・櫻井茂男 (2008). “やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討—進路不決断に及ぼす影響の観点から— 教育心理学研究 56, 1-13.
- Hesketh, B. Elmslie, S., & Kaldor, W. (1990). Career compromise: An alternative account to Gottfredson's theory. *Journal of Counseling Psychology*, 37, 49-56.
- Holland, J.L. (1973). *Making Vocational Choices: A theory of careers*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Jones, L. K. (1989). Measuring a three-dimensional construct of career indecision among college students: A revision of the Vocational Decision Scale—The Career Decision Profile. *Journal of Counseling Psychology*, 36, 477-486.
- Krumboltz, J.D., & Levin, A.S. (2004). *Luck is no accident: Making the most of happenstance in your life and career*. Atascadero, CA: Impact.
- 楠見孝・栗山直子・齋藤貴浩・上市秀雄 (2008). 進路意思決定における認知・感情過程—高校から大学への追調査に基づく検討— キャリア教育研究 26, 3-17.
- Langer, E. J. (1975). The Illusion of Control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 311-328.
- 松本卓三 (1994). 希望職業の選択に影響を及ぼす諸要因の検討—教職希望者と工業技術者希望者との比較— 進路指導研究 15, 1-10.
- Mitchell, K. E., Levin, S., & Krumboltz, J. D. (1999). Planned happenstance: Constructing unexpected career opportunities. *Journal of counseling & Development*, 77, 115-124.
- 永作稔・新井邦二郎 (2005). 自律的進路動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究 53, 516-528.
- 中野 良哉・大倉 三洋・酒井 寿美・栗山 裕司・稲岡 忠勝・宮崎 登美子・柏 智之 (2010). 医療系専門校生の進路動機と学校適応感 高知リハビリテーション学院紀要 11, 13-18.
- 下村英雄・堀洋道 (1994). 大学生の職業選択における情報収集行動の検討 筑波大学心理学研究 16, 209-220.
- 下村英雄・大村周 (1997). 大学生の就職活動ストレスとソーシャルサポートの検討 進路指導研究 18, 9-16.
- 下山晴彦 (1986). 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究 34, 20-30.
- 田中宏二・小川一夫 (1985). 職業選択に及ぼす親の職業的影響—小・中学校教師・大学教師・建築設計士について— 教育心理学研究 33, 173-178.
- 鶴飼洋一郎 (2007). 企業が煽る「やりたいこと」: 就職活動における自己分析の検討から 大阪大学年報人間科学 28, 79-98.
- Vansteenkiste, M., Lens, W., De Witte, S., De Witte, H., & Deci, E. L. (2004). The 'why' and 'why not' of job search behaviour: their relation to searching, unemployment experience, and well-being. *European Journal of Social*

内的要因に適合させて選択する進路への態度について

Psychology, 34, 345-363.

若松養亮 (1991). 教職への適合感および志望度と教育実習経験との関連について—幼児教育系の短大生を対象として—
進路指導研究 12, 19-26.

若松養亮 (2010). 大学生の進路意思決定における適合の判断—3年次生が就職活動前に重視する選択の観点と意思決定遅延の関連— 日本教育心理学会第52回大会発表論文集 292.